

本書は哲学者エーデイト・シュタインの名著『有限存在と永遠存在——存在の意味への登攀の試み』の概説書である。単なる概説書であつて研究書ではない。筆者は二〇一三年十月に同書の翻訳を開始し、二〇一七年四月に訳了した（出版は二〇一九年三月）。概説執筆の企図は訳了直後に遡る。無論「訳者後書き」に用立てる所存であつた。が、緻密かつ浩瀚な哲学書の「後書き」兼「解説」はおのずから大部に及び、ために同企図を断念し、浅薄蕪雑な感想を以て代用するに甘んじた。とはいえ、複雑な大著の登攀には道標の役割の無用ならざるを思い、一翻訳者の立場をも顧みず、ここに概説の筆を執つた次第である。

エーデイト・シュタインは日本では無名に近い哲学者である。研究書は僅少で、関連図書も伝記研究に偏向する。理由は単純である。シュタインが劇的生涯の具現者だからである。改宗したユダヤ人キリスト教徒であり、強制収容所の犠牲者であり、カトリック教会の殉教聖人だからである。

キリスト教徒の哲学は日本では黙殺されるべき宿命を負う。が、黙殺される理由はシュタインのキリスト教信

仰に限定されない。同哲学者が現代の合理的哲学の確立者の一人だからである。合理的思考は一般に退屈である。無味乾燥である。合理的だからである。ハイデガー思想とは違うのである。ハイデガーの弟子筋の奇矯な言説とは違うのである。現代の不合理哲学の人氣も思い半ばに過ぎよう。

とはいえ、筆者は「概説」を哲学者の伝記の素描から始める。思考の推移と伝記とが平衡状態を呈するからである。事実、幼年時代のユダヤ教信仰、棄教、キリスト教への改宗、両宗教世界の仲介、合理性への指向、大戦中の従軍看護婦としての挺身は、フッサール哲学への専心、同哲学からの離反、中世哲学への開眼、両哲学の合理的（批判的）連接の試み、贖罪のための殉教を彷彿させるからである。

哲学者エーデイト・シュタインは一八九一年十月十二日、ドイツ、シュレージエン地方の中心都市ブレスラウ（現ポーランド領ヴロツワフ）のユダヤ人家庭に出生し、一九四二年八月九日、跣足カルメル修道女会修道女テレシア・ベネディクタ・ア・クルーチェ（十字架のテレサ・ベネディクタ）としてアウシュヴィツ・ビルケナウのガス室で殺害された。

エーデイトの誕生日は奇しくもユダヤ教暦の「贖罪日」ヨム・キプーに当たっていた。翌々年、父親が急逝し、家業（材木商）は母親の手に引き継がれた。母親は熱心なユダヤ教徒で、エーデイトの精神生活に深い痕跡を残した。が、後年、エーデイトは若年の頃を回想して、十三歳から二十一歳まで自分は幼年期の信仰を完全に失っていたと述べている。一九一一年、ブレスラウ大学に入学。ゲルマニスティク、歴史、ギリシャ語の他に、心理学、哲学に関心を持つが、心理学には程なく失望し、現象学に志す。一三年、ゲッティンゲン大学に転じ、フッサールに師事して哲学研究に専心し、師フッサール、テオドーア・リップス、マックス・シェーラー等の研究に触発されて、博士論文『自己移入の問題』に着手する。また、先学、同学の士を通じてキリスト教に開眼する。別けてもアードルフ・ライナハ（プロテスタント）、シェーラー（カトリック）の影響が大きかった。

翌一四年、大戦勃発。エーデイトは学業を中断し、一五年四月から数箇月間、メーリシユ・ヴァイススキルヒエ

ン（現チエコ領フラニツェ）の野戦病院で傷病兵の看護のために挺身した。

一六年、ゲッティンゲンに戻り、研究を再開するが、フッサールのフライブルク大学への招聘を機に同地に移り、師の助手を務める傍ら、学位論文『自己移入の問題』を完成し、一七年、哲学博士号を授与された。フッサールの助手としてのエーデイトの仕事は、師の哲学の入門ゼミを担当し、加えて、師の草稿を完成原稿にすべく、取捨選択し、推敲し、補筆または加筆するにあつた。『イデーエン』第二、第三ならびに『内的時間意識の現象学』はエーデイトの協力の成果である。

一八年、フライブルクを離れ、翌一九年、大学教授資格取得論文「心理学ならびに精神諸科学の哲学的基礎づけへの寄与」（「心的因果性」「個人と共同体」の二編より成る）をゲッティンゲン大学に提出するが、不首尾に終わった。当時、女性が（況してユダヤ人女性が）大学教授になる道は固く閉ざされていた。

二一年、ゲッティンゲン時代の友人ハンス・テオドーア・コンラート（妻はヘートヴィヒ・コンラート＝マルティウス）の許に滞在中、同夫妻の蔵書中に『アヴィラの聖テレサの自叙伝』を見出し、一気に読了する。すでにキリスト教への道に踏み出していたエーデイトは同書を通じて決定的回心を経験する。

二二年一月一日、カトリックに改宗（洗礼名、テレージア・ヘートヴィヒ）。二三年、ドミニコ会系の聖マクダレーナ女子高等学校と教員養成校で教職に従事する。給与の大半を辞退し、同修道女会の一室に起居して、信仰生活に沈潜する。また、同校在任中、エーリヒ・プシュヴァラの助言に従い、聖トマス・アキナスの『真理論』ならびにジョン・ヘンリー・ニューマンの著作の翻訳に従事する。論文「フッサールの現象学と聖トマス・アキナスの哲学——対比の試み」（二九年）、『有限存在と永遠存在——存在の意味への登攀の試み』（三五―三六年）は当時のトマス研究の成果である。また、教育研究活動の傍ら、依頼に応じて、パリ、プラハ、ザルツブルク、バーゼルならびにドイツ諸都市において、女性論、女子教育に関して講演を行う。三二年、ドイツ教育学研究所（ミュンスター）の講師に就任。十年を経て再び学究生活に戻る。同年九月、トマス学会からの招待を受

け、ジュヴィジイ（フランス）において、現象学に関する諸家の問いに答える（「付録」参照。出席者の中には、ジャック・マリタン、エティエンヌ・ジルソン、アンリ・グイエ、アレクサンドル・コイレ等が含まれていた）。しかし、翌三三年一月のヒトラー政権の樹立と職業官吏再建法の施行（同年四月）に伴い、ユダヤ人の公職追放が始まる（「……」）今ユダヤ民族の上に置かれているのは『主』の十字架です。「……」同事実を理解するユダヤ人は全ユダヤ人の名において進んで十字架を担うべきです²。同年五月、同研究所講師の任を解かれる（「一連の出来事の背後には、偉大な、慈悲深い導きがあると思われ³」）。

十月十四日、跣足カルメル修道女会（ケルン）に入会。志願期に入る。翌三四年四月、着衣式。修練期に入る。三五年四月、初誓願（三年間の有期誓願）宣立。三八年四月、莊嚴誓願宣立。

しかしナチズムによる反ユダヤ主義の動きは、その間にも国内に広く波及し、すでに止め難い巨大なうねりを生じていた。三四年八月、ヒトラーが総統に就任。三五年九月、ニュルンベルク法（反ユダヤ的人権法）成立。三八年十一月七日、ドイツ国内のシナゴグならびにユダヤ人の商店と住居の大半が破壊され、多数の死傷者が出た（所謂、飛散した「ガラスの夜」⁴）。四〇年五月、アウシュヴィツ強制収容所開設。

三八年十二月三十一日、エーディトは難を避けるべく、オランダのエヒトのカルメル会に移動する。三九年三月、同修道院の院長宛に一書を呈して言う。「真の平和のための贖罪の生贄として、イエズスの御心に私自身を御捧げする御許可を戴き度う存じます。願わくは反キリスト者の支配が崩れ、再度の世界大戦が回避され、新たな秩序が確立されますように。叶うことならば、今日にでも私自身を御捧げし度う存じます。すでに最後の時が来ているのですから。固より私は無に等しい人間でございます。が、これはイエズスの御意思でございます。イエズスは、今後、間違いなく、多数の人間に同じ御意思を御示しになりました⁵」。

同年六月、同修道院長宛に遺書を認める。「私は神の思し召しなる死を、御旨に従い、遜り、今やここに欣喜して拝受致します。願わくは『主』が私の生と死を『主』の荣誉と栄光化のために受納されますように。聖な

る教会の「……」全誓願のために、別けても我等の聖なる修道会、就中ケルンとエヒトのカルメル修道院の存続と聖化と完成のために「……」、『主』がユダヤの民に迎えられ、而して、ドイツの解放と全世界の平和のために、また最後に、神が私に恵与された生ける同胞と死せる同胞のために、全成員のために、御国が、栄光の内に来ますように。なべて滅亡を免れるために³。ハイデガー流の単なる「可能性としての死に先駆する現存在」なる「死のための人間」論とエーデイト・シュタインによる真の「死のための存在」としての人間認識の違いに留意されたら⁶ (Vgl. EE: 473ff.; 457以下)。

四二年八月二日、姉ローザ(三六年、カトリックに改宗。三九年以降、エヒトのカルメル会に寄寓)と共に自発的にゲシュタポに逮捕され、従容として受難に向かう。さながらナザレのイエシュアのように。「さあ、ローザ、行くのです、私共の民のために」。修道女テレシーシア・ベネディクタ・ア・クルーチェの修室には遺著『十字架学——十字架のヨハネ研究』(Kreuzeswissenschaft, Studie über Joannes a Cruce)の原稿が遺されていた。

ヴェステルボルク収容所(オランダ)を経て、同月七日、アウシュヴィツ「ビルケナウ」に移送され、九日、ガス室にて絶命。殉教であった。

一九八七年五月一日、ケルンにて福者(Beat)に列せられる。

一九九八年十月十一日、ローマにて聖人(Sancta)に列せられる。

本書は『聖エーデイト・シュタインの永遠哲学』を標題に掲げる。「永遠哲学」(philosophia perennis)は新スコラ哲学者等の愛好せる用語である。同哲学者等は己が哲学中の特定の形而上学的諸根本命題の永遠の妥当性を確信する。同諸命題は聖トマス・アクイナスの著作に基礎を置く。因みにヤスパースも同語を採用した。エーデイト・シュタインは厳密に言えば新スコラ哲学者ではない。が、シュタインの「主著」の哲学思考の特性に鑑み、同哲学者の意向を尊重して、本書を斯く命名した。